

に存在し、皮下でレジン板上及び骨上に弾性硬の腫瘤が存在し、頭蓋骨へ連続的に移行していた。皮下の腫瘤を摘出し、骨に接着する部位は削除した。組織学的には、meningotheliomatous meningioma であった。本症例は、頭蓋骨に浸潤したもよりの再発と考えられ、髄膜腫の手術に際し、留意する必要があると思われた。

52) 興味ある経過をたどった腫瘍内出血を呈した頭蓋咽頭腫の一例

北 秀幸・嘉山 孝正 (国立仙台病院)
 小川 彰・桜井 芳明 (脳神経外科)
 和田 徳男
 吉本 高志・鈴木 二郎 (東北大学脳研)
 (脳神経外科)

我々は、頭蓋咽頭腫で腫瘍内出血を起したにもかかわらず、症状が軽快した一例を経験したので報告する。

症例：33歳男性。1985年春頃より前頭痛、7月頃より複視、9月初旬には見当識障害が出現し、当科へ入院。CTでは、第3脳室を充満し、一部石灰化を伴ったやや低吸収域を示す mass を認め、水頭症を呈していた。ところが、入院後1週間目頃より見当識障害が消失し、そのときのCTでは腫瘍内に低吸収域を認め、腫瘍内出血と考えられたが、massは減少し、水頭症も軽減していた。その理由として、腫瘍自体が多房性であるため、その一部のCystに出血し腫瘍内圧が上昇し、他のCystがruptureし、全体としての容積が減少したためと思われた。

53) 天幕上下に伸展した腫瘍の手術例

畑中 光昭 (十和田市立中央病院脳神経外科)

小脳橋角部髄膜腫1例、斜台髄膜腫1例、小脳橋角部類上皮腫2例の計4例のテント上下に拡がる腫瘍に対して摘出術を行なったが、Transpetrosal-Transtentorial Approach 3例、第1期にSuboccipital approach、第2期にSubtemporal approachの2stageで行ない全摘した1例であった。Transpetrosal-Transtentorial approachのうち1例はpetrosal boneにかかれてTumcorの全摘できず、2stageで全摘した例が1例あった。2stageで全摘する事は問題ないが、白馬のTranspetrosal-Transtentorial approachより、より前方に開頭をのぼし、Subtemporal approachに余裕を持たせると、temporal damageもなく、1stageで腫瘍全摘できる例が増えるものと思われた。

54) 最近経験した聴神経鞘腫の検討

渡辺善一郎・川上 雅久 (福島県立医科)
 浅利 潤・根本 仁 (大学脳神経外科)
 山尾 展正・児玉南海雄

1982年10月より1985年6月迄経験した聴神経鞘腫17例について検討した。14例(82%)は、腫瘍の長径が4cm以上の非常に大きな腫瘍でありこのうち6例は他の施設で既に部分摘出術を施行されて再発した症例である。手術は後頭下開頭で全例腫瘍全摘術を行ない、1983年4月以降は術中神経刺激装置を用い顔面神経の温存を試みた。顔面神経麻痺が残存した症例では、ADLを一段階下げて評価すると、手術6ヶ月迄では、ADL1が5例、2が10例、3が1例、消化管出血で1例死亡した。術中モニター導入以降の顔面神経機能の温存率は71%であった。聴神経鞘腫の治療成績を向上させるには、早期診断及び術中脳神経機能の温存に努めるべきである。

55) 天膜髄膜腫の臨床像

—自験17例の検討—

加藤 正哉・鈴木 晋介 (東北大学脳研)
 新妻 博・鈴木 二郎 (脳神経外科)

1968年～1984年の間、当科で経験したtentorial meningioma 17例について、臨床像と手術手技及び手術結果について検討した。症例の内訳は男5例、女12例で、年齢は26歳～71歳平均48歳であった。初発症状は17例中11例が頭蓋内圧亢進症状で、4例が小脳症状、2例が脳神経症状であった。腫瘍の進展方向ではテント上下に又がるものが8例あったが、このうちテント切痕付近に発育した3例はsubtemporal-transtentorial approachにて摘出が可能であり、一方テント後半部で上下に又がる進展をしめた例では、テント上下での開頭が必要であった。手術結果は全摘11例、亜全摘が5例であったが術後死亡が2例あり、それぞれ出血、及び広範な小脳浮腫によるものであった。追跡調査の結果再発を思わせる経過のものはなかった。

56) 新生児 optic glioma の2症例

安藤 彰・大熊 洋揮 (弘前大学)
 轟麦田英治・蛭名 国彦 (脳神経外科)
 鈴木 重晴

新生児期に発症する脳腫瘍は、それ自体先天性とも考えられ数少ないものであるが、最近私達は中でも稀と思われるoptic gliomaの2症例を経験した。第一例は生後25日頃発症の男児、第二例は生後50日過ぎに発症の女児であり、2症例とも軽度意識障害、哺乳力不良、視力障害をもって初発している。両症例とも手術が行なわ